

## 令和元年産多収性品種等の実証試験結果について

J A全農にいがたでは、本県に適した多収性水稻品種の選定、ならびに多収技術の確立・普及などを目的に、実証試験に取り組みました。

### 1. 実施数

16 J A 2 2 か所 (8 品種)

### 2. 結果

「つきあかり」「ちほみのり」「にじのきらめき」「あきだわら」の4品種は、平均実収量が600kg/10aを超え(地域の合理的な単収比で100%以上)、多収性を確認することができました。

#### 【主な品種別の結果】

- (1) ちほみのりは、総粒数が4万粒/m<sup>2</sup>確保されたことで661kg/10aの多収となりました。
- (2) ゆきん子舞は、倒伏により低収であった1か所を除くと平均実収量は645kg/10aの高収量となりました。
- (3) にじのきらめきは、平均実収量が669kg/10aとなり8品種のなかで最も高い収量となりました。

#### 【品種別実証成績(平均)】

品種	圃場数	植付株数 (株/m <sup>2</sup> )	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	粒数 (粒/m <sup>2</sup> )	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	実収量 (平均) (kg/10a)	地域の合理的な単収との対比 (%)
つきあかり	6	18	360	29,029	77.5%	24.1	618	110
ちほみのり	5	18	627	40,457	71.2%	21.8	661	123
ゆきん子舞	4	18	434	37,569	76.4%	22.7	591	107
にじのきらめき	3	17	406	35,689	76.6%	23.6	669	121
あきだわら	1	16	281	27,257	77.0%	21.4	642	112
大粒ダイヤ	1	15	462	48,893	53.6%	29.2	590	103
かずさ11号	1	20	473	37,522	78.0%	21.1	525	91
ミルクースター	1	19	420	44,520	67.1%	20.3	585	107

### 3. 課題

(1) ちほみのりは、他品種より出穂期が早いことなどにより、カメムシ類による斑点米被害が下越地区で多く発生しました。そのため、畦畔や農道の除草を徹底するとともに出穂期に応じた防除が重要です。

また、幼穂形成期以降の葉色（SPAD）値 42 以上を確保し、稈割れや早期出穂の防止に努める必要があります。

(2) つきあかりは、過去 3 年間の実証試験で白未熟粒混入による品質低下が多い傾向にありました。品種特性上、玄米に腹白が出やすいため、過剰な穂肥、早期の落水、刈り遅れは避け、収量の確保だけでなく、品質も兼ね備えた栽培が必要となります。

(3) 多収性品種では、早期茎数確保と幼穂形成期以降の栄養確保により、総粒数確保のための栽培管理が重要です。

また、気象変動に負けないよう、土づくりと適期中干等の水管理により受光態勢の改善も重要となります。

（JA全農にいがた 米穀部 総合対策課）

※ 掲載内容の無断使用・転載を禁じます。